

# 中高大が連携したライティング・ループリックの開発

岩 崎 公弥子      内 山      潤      時 岡      新  
Kumiko IWAZAKI      Jun UCHIYAMA      Arata TOKIOKA

柳 瀬 公 代<sup>\*1</sup>      福 田      順<sup>\*2</sup>  
Kimiyo YANASE      Jun FUKUDA

Development of the writing rubric:  
collaboration with junior high school, high school, and university

## はじめに

近年の高度情報化とグローバル化の急速な発展を背景に、学生が身につけなければならない知識や技術、能力が量的にも質的にも変化してきている。社会が多様化し、変化の激しい時代を生き抜くには、従来の知識だけではなく、自らが考え抜く力、課題を発見し解決する力、言語や数量を活用する力、チームで働く力、すなわち、「思考力」「基礎力」「実践力」をあわせもつ汎用的能力が必要である。これらの力を培うことで、リーダーシップをもち社会で活躍する女性、人と人をつなぐピースメーカーとなる女性を育成することができる。

このような社会的要請を背景に学びの現場では、「教師主体（Teaching）から学習者主体（Learning）へ」「受動的な学びから能動的・自律的な学びへ」「授業の提供から学習の生産へ」と、教授パラダイムから学習パラダイムへの転換が起きている。そして、この学習パラダイムを支える学びが「アクティブ・ラーニング」である<sup>1</sup>。これは、従来の一方向的な知識伝達型授業を乗り越えて、能動的に生徒・学生が考え、判断し、表現することを示す。溝上（2014）は、「アクティブ・ラーニング」の重要な観点として、「書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化」を

---

<sup>\*1</sup> 金城学院高等学校教諭      <sup>\*2</sup> 金城学院中学校教諭

<sup>1</sup> 2008年の「学士課程教育の構築に向けて（答申）」で、教授パラダイムから学習パラダイムへの転換を進める流れが生まれ、2012年の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）」において、アクティブ・ラーニングが施策化された。

掲げている<sup>2</sup>。すなわち、「書く・話す・発表する」という行為が、学習者の考える力、論理的に判断する力、意思決定する力、問題解決する力、創造する力を育むのである。

金城学院においては、中学や高校では独自の教育プログラム・Dignityのなかで、大学では各学部学科の演習科目（例：WLI（国際情報学部）<sup>3</sup>）のなかで、「書く・話す・発表する」力の強化・育成を行ってきている。これらの学びの効果は、学内のFDや学会、シンポジウムなどで報告されており、次第にその成果が明らかになっている。

ところが、能動的に学びと向き合い、書く・話す・発表するスキルを育成していくことは、決して簡単なことではない。いずれも繰り返し経験を積まなければ獲得することはできない能力であり、もっと言えば、学習者自身が学びのプロセスと向き合い、学習のPDCAサイクルを自力で回していかなければならないのである<sup>4</sup>。学習者が自力でPDCAを回すには何らかの指標が不可欠である。そこで、本研究では、中学・高校・大学の10年間の学びを連続したものとして捉え、10年間活用できる学びの指標（＝ループリック）を提案する。これにより、生徒・学生は、学びのプロセスを複数年に渡り、目に見える形で積み上げていくことができる。

今回、本論文では「書く・話す・発表する」の内、「書く」をとりあげ、その中でも「アカデミック・ライティング」に着目し、ループリック開発の過程を示しながら、その特徴を述べる。

## 1. ループリック

### 1-1. ループリックとは

学びを評価するには、テスト法、レポート法、観察法、自己評価法、相互評価法など、様々な手法がある。テスト法は「知識・理解」を評価するのに、レポート法は「思考・判断」「態度」を評価するのに、観察法は「関心・意欲」「技能・表現」を評価するのに適している。一方向的な知識伝達型授業が主流であった時代においては「知識・理解」を評価するテスト法が主要な評価方法であったが、現在では、より多面的な観点から学びを評価するため、様々な手法がとられるようになってきた。このような背景のなか、注目されているのがループリック評価である。沖（2014）が述べるように、ループリックは、「思考・判断」「関心・意欲」「態度」「技能・表現」の評価に適しており、現在、

---

<sup>2</sup> 溝上（2014）p.9.

<sup>3</sup> WLIは、Women's Leadership Initiativeの略で、リーダーシップを育成する科目群。WLIAからFまで開講されており、主体的な学びを通じて、様々な課題をチームで解決する方法を学ぶ。

<sup>4</sup> PDCAとは、PLAN（学習目標を立てる）、DO（学ぶ）、CHECK（学習成果の可視化により、自ら学習した内容や成果を確認する）、ACT（振り返りを行い、改善する）のこと。

多くの大学や初等中等教育でルーブリックが開発され、活用されている。

ルーブリックには種々の形式があるが、一般的に用いられているものは、評価観点とその評価観点到即した評価尺度（レベル）からなるマトリックス形式のものである。表1に関西国際大学が開発した「チームワーク」ルーブリックの一部を抜粋する。左側に観点を配し、4つのレベルで評価基準を表している。

表1 関西国際大学「チームワーク」ルーブリック（抜粋）<sup>5</sup>

	4	3	2	1
チームでの話し合いへの参加	チームでの話し合いにおいて、話し合いを進展させるような建設的発言を積極的に行っている	チームでの話し合いにおいて発言を行い、話し合いをリードしている	チームでの話し合いにおいて関連する発言を行っている	チームでの話し合いの場に参加している
グループワークへの個人の貢献	グループワークに積極的に参加して、高い完成度での課題の達成に多大な貢献ができています	グループワークに参加し、課題の達成に貢献できている	グループワークに参加して、作業の遂行に協力している	グループワークに参加して、要望を受けて作業を手伝っている

米国では、ルーブリックは、1990年代から、思考や判断、表現する力、また、得た知識を活用する力を評価する、所謂、パフォーマンス評価のツールとしてポートフォリオとともに開発され、活用されるようになってきた。ルーブリックは、授業の単位ごとと授業ごと、あるいは、学校ごとに作られているが、米国ではさらに大きな枠組みとして大学を越えて利用可能なルーブリックの開発も行われている。それが、全米カレッジ・大学協会（Association of American Colleges & Universities:AAC&U）が開発・運用する VALUE Rubricsである。

VALUE Rubricsでは、「探求と分析（Inquiry and analysis）」「文書表現（Written communication）」「倫理的推論（Ethical reasoning）」など、全部で16領域が定められている。また、各々の領域のルーブリックは、複数の評価観点と各観点对する4段階の評価尺度からなっており、レベル1（ベンチマーク）は入学生レベル、レベル2～3（マイルストーン）は中間レベル、レベル4（キャップストーン）は学士号に期待されるレベルとなっている。これらは、大学ごとのルーブリックよりももう一段抽象度が高い「メタルーブリック」として、あるいは、大学がルーブリックを開発する際に参考にするプロトルーブリックとしてデザインされている。実際に活用する際には、大学、学科、科目の文脈のなかでローカライズされなければ機能しないが、VALUE Rubrics

<sup>5</sup> 関西国際大学の HP（大学間連携共同教育推進事業）から、ルーブリックを閲覧することができる。表1は、チームワークのルーブリックだが、4つある評価観点のうち、2項目を抜粋した。

をベースとして用いることで、「大学をこえた共通性と大学間の多様性の統一」<sup>6</sup>を図ることができる。

表2 VALUE Rubrics「文章表現」ルーブリック(抜粋)<sup>7</sup>

	最終基準	中間基準		ベンチマーク
	4	3	2	1
文章の背景と目的	課題の背景、読み手、目的を完全に理解し、すべての要素に注意を払う。	課題の背景、読み手、目的、焦点を適切に理解している。(課題が読み手、目的、背景と適合している)	背景、読み手、目的、課題を意識している。(読み手の認識や仮説を考慮し始める)	背景、読み手、目的、課題に対し最小限の注意しか払っていない。(教員や自分が読み手だと考えている)
内容の作成	テーマに関する精通度を示す、適切で関連性や説得力のある内容を使用して、書き手の理解を伝え、文章全体を作成する。	専門領域の範囲内で考え方を探求するため、適切で関連性や説得力のある内容を使用して、文章全体を作成する。	文章の大部分において、考えを発展させ探求するため、適切で関連性のある内容を使用する。	文章のいくつかの部分において、簡単な考えを発展させるため、適切で関連性のある内容を使用する。
構文や機構のコントロール	読み手に意味をうまく伝える、明確で流暢でほとんど間違いのない品格のある言語を処する。	読み手に大まかな意味を伝える、分かりやすい言語を使用する。使用する言語にはほとんど間違いがない。	読み手に大まかな意味を明確に伝える言語を使用するが、いくつかの間違いがある。	使用する言語に間違いがあり、時として意味が正しくない。

VALUE Rubricsのような「共通性と多様性の統一」という考え方は、大学という横の枠組みで見た時、極めて重要である。すなわち、どの大学で学んでいたとしても「学士号」を授与する基準を明確に示すことができるからである。では、ルーブリックを縦軸で見たらどうなるであろうか。日本においても、岡山市立津島小学校(岡山)、大垣北高等学校(岐阜)、関西国際大学(兵庫)など、小学校から大学に至るまで、優れたルーブリックが開発され活用されている。しかし、初等教育、中等教育、高等教育とでは、目標とするラーニングアウトカムそのものが異なっていることから、ルーブリックにおいても、小学校から中学校へ、中学校から高校へといった接続が考えられていない。すなわち、学習者の視点に立つと、ルーブリックでは、校種を越えた教育成果の積み上げができないのが現状である<sup>8</sup>。米国では、幼稚園から大学まで(K-16)をひとつの枠組みとしてとらえ、大学卒業時まで培うべきラーニングアウトカムを明らかにし、そこに向けた目標設定を段階ごとに行っている。そこで、本研究では、中学、高校、大学が連携することにより、連続性のあるルーブリックを提案する。

<sup>6</sup> 松下(2014) p.243.

<sup>7</sup> Association of American Colleges & Universitiesの「VALUE Rubrics」HPから、ルーブリック(日本語訳)を閲覧することができる。表2は、文章表現のルーブリックだが、5つある評価観点のうち、3項目を抜粋した。

<sup>8</sup> 文部科学省「予想困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力をはぐくむ大学へ」p.13.

## 1-2. ルーブリックの効果

近年、日本においても、立命館大学、大阪大学、東京女子大学など多くの大学でルーブリックが活用され、多くの実践が報告されている。これらの報告により、様々なルーブリック評価の利点が明らかになってきた。以下にこれらの利点を整理し、列挙する<sup>9</sup>。

### <教師>

- ・評価基準が明確になるため成績評価に一貫性と公平性が確保される。
- ・評価時間が短縮される。
- ・感覚的に捉えがちであった、学習過程を評価することができる。
- ・評価観点と学生の到達度が明確になることから授業改善に役立てることができる。
- ・学生へのフィードバックが改善される。
- ・教員間の情報共有が効果的に行われる。

### <生徒・学生>

- ・授業への能動的な参画が促進される。
- ・評価基準が明確になるため、到達目標に向けた学習活動に取り組める。
- ・自らの学習活動を振り返り、客観的に評価し、改善へとつなげることができる。
- ・ペアワーク、他者評価を行う際の評価指針になる。

このように、目標達成レベルとそこに至る過程が言語化あるいは数値化されることにより、多くの利点がもたらされるのである。本研究においてもこれらの利点を念頭に入れながらルーブリックの開発を進めていく。

## 2. 「アカデミック・ライティング」ルーブリック

### 2-1. 「アカデミック・ライティング」の学び

中学、高校、大学で活用するルーブリックを開発するにあたり、本研究では、以下の3点から、「アカデミック・ライティング」に着目する。

1つ目は、「書く」行為そのものが、学ぶ活動において重要であるからである。井下(2008)が述べるように「学生自らが主体的に書くこと考えることによって、学びをメタ的に俯瞰し、自分にとって意味のある知識として再構築することができる」<sup>10</sup>。ただし、これは、感じたことや分かったことを書き連ねる「綴り文章」ではなく、問いを立て、

---

<sup>9</sup> 沖(2014)、西谷(2017)、琉球大学(2017)で論じられたルーブリックの利点を参考にしてまとめた。

資料や情報を収集しながら、自分の意見を主張する「論理的な文章」、すなわち、アカデミック・ライティングを指す。

2つ目は、高校までに自分の考えを理由や根拠に基づき「書く」という経験を十分にしていないからである。これは、渡辺（2017）が、「高校で意見文や説明文の書き方を学ぶ経験は少なく、国語の授業でもまとまった長さの文章を書く機会は少なく、また「書く」学習は「読む」学習に対して劣後するようである。」と指摘するところのものである<sup>11</sup>。そのため、大学に入学してから多くの授業で課せられるレポートに戸惑う学生が極めて多い。そのため、継続的な「書く」力の育成に着目する必要がある。

3つ目は、学生の文章表現低下と大学のユニバーサル化の対策として、2000年ごろから大学に初年次教育科目が導入され、「レポート・論文の書き方等の文章作法」を教える大学が増えてきた点である。この流れは全国の大学で見られ、2015年の文部科学省のまとめによると、初年次教育実施の721大学のうち 89%に当たる661校が「レポート・論文の書き方等の文章作法」を実施している<sup>12</sup>。すなわち、多くの大学で論理的な文章を書く学びが行われており、そのための試行錯誤がなされている。その対策として、中等教育からの一貫した書く能力の育成は有効である。

以上、3つの理由から、本研究では育成すべき「書く・話す・発表する」の力のなかでも、まずは、「アカデミック・ライティング」を取り上げ、ループリックの開発を行う。なお、本研究で述べる「アカデミック・ライティング」は、綴り文章ではなく、堀（2019）が述べる下記の要素を含むものとする<sup>13</sup>。

- ◎「問い」と「答え」の構造と、論理的な説明（妥当な論証）で構成されている。
- ◎説明の根拠となる情報が明示されている。
- ◎説明文がパラグラフ構造になっている。
- ◎引用など学術的な倫理のルールに従っている。
- ◎学術的文章に特有の一定の形式（書式）に従っている。

これらの要素を言語化し、視覚化したループリックの開発を目指す。

---

<sup>10</sup> 井下（2008）p.4.

<sup>11</sup> 渡辺他（2017）pp.59-60.

<sup>12</sup> 文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について（平成27年度）」

<sup>13</sup> 堀他（2019）p.2.



## 2-2.「アカデミック・ライティング」ルーブリックの事例

自らの意見をふまえ、論理的に「書く」という行為は、校種、学部、学年、授業にかかわらず、どの段階においても、思考を働かせ、知識を活用させるために極めて重要な学習活動となる。学びの現場では、「アカデミック・ライティング」力の向上のため、ルーブリックの開発が急速に進められている。以下にいくつかの大学で利用されている「アカデミック・ライティング」ルーブリックを列挙し、評価観点とその特徴を表3にまとめる。

表3 「アカデミック・ライティング」ルーブリック事例

関西国際大学 <sup>14</sup>	名称	ライティング
	評価観点	「課題に対する記述」「論理的構成」「レファレンス資料」「文章の体裁」「表現の推敲」
	特徴	全体のライティングルーブリックを作成し、そこから、下位学年用、上位学年用のルーブリックが開発されている。全体が0～5の6段階、下位学年、上位学年はそれぞれ0～3の4段階で評価している。
東京女子大学 <sup>15</sup>	名称	卒業論文（コミュニケーション専攻）
	評価観点	「人間科学に関する高度な知識と社会貢献の意欲」「研究テーマの設定・問題提起をする力」「文献研究をベースに有用かつ検証可能な仮説を立てる力」「先行研究などの他者の著作を正しく引用できるスキル」「(a)か(b)のいずれか (a)仮説を検証するための適切な実証研究を計画・実施する力 (b)課題を明らかにするための適切な実証研究を計画・実施する力」「実証研究結果をデータ分析・解釈する力」「得られた知見を研究論文として報告できる力」「批判的な環境で説得的に主張する力（口述試験）」
	特徴	卒業論文を書く上で重要な観点を8つにまとめている。書き方そのものだけではなく書くために必要な力やスキルの観点から評価項目を作成している。
立命館大学 <sup>16</sup>	名称	論文作成の技法
	評価観点	「文章表記」「文章表現」「文と文のつながり」「主張と根拠」「情報の選択」「読み手に配慮した説明」
	特徴	教員が活用するほか、TAが「文章診断」で活用するルーブリック。何度か改定を行い、使いやすい文言に修正している。「ほぼ」「若干」といった曖昧な表現をなくすなど、誰もが迷わず評価できる工夫を施している。
関西大学 <sup>17</sup>	名称	入門演習・基礎演習用クラスルーブリック
	評価観点	「問いの明確さ」「資料の収集」「資料の整理」「全体の構成」「引用」「表記・その他」
	特徴	関西大学・ライティングラボが開発したルーブリック。この他にも、論文作成のための、期末レポートのための、ブックレポートのためのなど、ライティングに関する様々なルーブリックが開発されている。

表3のように学校ごとに様々な評価観点を設定し、開発を行なっている。また、ルー

<sup>14</sup> 関西国際大学「学修成果の可視化」

<sup>15</sup> 東京女子大学コミュニケーション専攻「卒業論文作成・提出の手引き」

<sup>16</sup> 中島（2017）p.205.

<sup>17</sup> 関西大学ライティングラボ「学びの方向性と達成度を判断する評価ツール(ルーブリック)」

ブリックは、立命館大学のように、教員だけが使うのではなく、学生やTAなど様々な立場の人が他者評価、自己評価を行いながら利用することがある。ループブリックの評価基準が「曖昧」とであると、公平な評価や振り返りが効果的に機能しなくなる。ループブリック作成者はどのような状況で、どのようにループブリックを活用するのか、また、何を到達目標とするのか、十分に検討しながら作成しなければならない。

### 3. 「アカデミック・ライティング」ループブリックの開発

#### 3-1. ループブリックの開発

本研究における「アカデミック・ライティング」ループブリックの開発は、中学1名、高校1名、大学3名の教師からなる研究グループで行った。作成手順は、西谷（2017）が、Linda, S.の著書に基づき作成した表4を参考にした<sup>18</sup>。

表4 効果的なループブリックの作成における7つのヒント

項目（抜粋）	詳 細
(1) モデルを探す	評価の状況にあったループブリックを探し、作成するためのモデルにする
(2) 学生に求める事柄をリストアップする	学生が提出する成果物で、示してほしいスキルや能力を列挙する。また、特徴や基準なども挙げる。3～8項目で設計する
(3) 評定尺度を作成する	定性的で構造化された観察の指針を作成し、評定尺度を構成するレベルを定義する
(4) 3～5段階のレベルを設定する	評価の明確化のために、一般に5段階以上のレベルを設けない。また学生の動機付けのために、模範的な評価レベルを加える
(5) 各レベルに名称をつける	学生に適した明確な記述をする。その際、最小限に容認できるパフォーマンスを表示する
(6) 各パフォーマンス・レベルの特性を記述する	模範的な成果物と及第点を与えられる成果物との明確な選定のために、基準を設定する

表4の「(2)学生に求める事柄をリストアップする」について、本研究では金城学院中学、高校で力を入れて指導している「リサーチクエスト」や大学でも身につけている学生が少ない「パラグラフ・ライティング」を観点として加えた。「(4)3～5段階のレベルを設定する」については、本研究では10年間使用するため、6段階に設定した。レベル1・2が中学レベル、レベル3・4が高校レベル、レベル5・6が大学レベルを示している。

本研究で示す「アカデミック・ライティング」ループブリックの評価観点は、大きく分けて下記の2つの項目、10の観点からなる（表5）。

<sup>18</sup> 西谷（2017）p.27.



表5 「アカデミック・ライティング」ルーブリック

[illegible]

論理的表現：「リサーチクエスション」「先行研究」「調査の設計と実施」「分析」「結論」  
「全体構成」「パラグラフ・ライティング」

文章表現：「表現ルール」「引用文献・参考文献」「文法・語彙」

今後は、次節で述べた教員による実際のレポート評価を繰り返しながら、尺度や文言の整理を行い、教師や生徒・学生にとって使いやすいルーブリックへと発展させていきたい。

### 3-2. 評価

2018年8月31日に中学、高校、大学の教員が集まり、ルーブリックに関する勉強会を開催した。参加者は、大学教師12名、高校教師25名、中学教師15名、職員3名である。勉強会は2部構成になっており、1部では高等教育の専門家による講習会を行い、ルーブリックの活用方法や開発手順について学び、2部では、4～5名のグループ（中学、高校、大学の混合）に分かれ、今回作成した「アカデミック・ライティング」ルーブリックを用いて、中学、高校、大学の学生が書いたレポートを評価した。中学は2年生が書いた弁論大会のための文章、高校は3年生で書いた小論文、大学は1年生のゼミで書いたレポートである。その後、ルーブリックの評価観点と評価尺度（レベル）に関してディスカッションを行なった。



図1 ルーブリック勉強会の風景

本研究で作成した「アカデミック・ライティング」ルーブリックの課題として、以下の意見があげられた。

- ① 「～にとどまっている」「～ができない」といった否定的な言葉ではなく肯定的に表現すると良い。

- ② レベル6（＝大学 AA～A）を最高のレベルとして定め、そこからレベル1に向かって減点した内容で表現しているのに違和感がある。
- ③ ルーブリックとして大きな枠組みはできているように思える。今後は、中学、高校、大学でより細分化されたルーブリックを校種ごとに作ると良い。
- ④ 中学生にとっては、レベル6はとても高度なものに見える。従って、レベル1からレベル4までを中学生用に、レベル2からレベル5までを高校生用にと切り分けると良い。
- ⑤ 教員が活用するルーブリックとしては良いが、中学生が活用するには表現が難しい。生徒用には表現を変えたルーブリックが必要である。
- ⑥ 中学、高校、大学によって、文章を書く目的が異なるのではないか。

上記①と②については、アカデミック・ライティングを初めて学ぶ中学生は多いため、たとえレベル1の内容であったとしてもそれを理解しその内容に向けた努力が難しい場合がある。そのため、「できない」という否定的な書き方ではなく、「～はできる」といった肯定文で書く方が良いとの意見があげられた。また、中学には中学の、高校には高校の到達レベルがあることから、レベルを設定する際は大学レベル（レベル6）より劣るような表現にならないように注意すべきとの意見が聞かれた。

上記③と④については、評価観点や評価基準の大枠はできているが、中学生にとってレベル6がとても難しいことのように思える。そのため、全体を提示しつつも、中学、高校、大学用と表を分割すると良いとの意見があった。

上記⑤については、実際に使う生徒・学生が分かりにくい表現がある。ルーブリックの内容を理解するのに時間がかかってしまうため、たとえば、「文同士の関連性」を「文と文のつながり」にするなど、理解しやすい文章にすると良いとの意見があった。

上記⑥については、多くの意見が教員から出された。中学、高校、大学では書いている文章の質が異なるのではないかという点である。これらについては次節で詳しく述べ、考察を深める。

### 3-3. 今後の課題

高校までの「書くこと」と大学での「書くこと」について、到達目標が異なる場合がある。渡辺（2017）は、2016年の日本の高校で使用されている「国語」の教科書48点を調査し、教科書にレポートあるいはそれに類する文章が教示されているか否かについてまとめた。その結果、以下のことが示された<sup>19</sup>。

---

<sup>19</sup> 渡辺他（2017）pp.36-46.

- ① レポートは、今日の高校の国語においては「事実に基づいて論理的に述べるタイプの文章」のバリエーションの1つにすぎない。レポートの存在感は、意見文や小論文と同じかそれよりも小さい。
- ② 高校の「レポート」は、事実を他者に伝えることのみ強調されており、意見や主張はあまり強調されていない。
- ③ 高校と大学の間で、レポートの意味と性質が異なる。そのため、大学新生にとって困惑の一因となり得る。高校ではレポートより、むしろ、意見文や小論文の方が大学のレポートに近い。

続いて、渡辺（2017）は、意見文と小論文についても国語の教科書 48点を調査した。その結果、下記のことが示された<sup>20</sup>。

- ① 高校で教えられる意見文と小論文は、名称こそ異なるが、大学におけるレポートとつながっており、「意見を述べること」を重視している。
- ② 教科書でカバーされていない、あるいは、不十分なものには「文章を『組み立てる』技術」「引用の具体的技術」「推論の具体的技術」「再帰的な文章作成」の4点がある。そのうち「文章を『組み立てる』技術」とはパラグラフ・ライティングを指す。

これらの点から、一般的に、高校までの「書く」学びは、事実を伝えることは行なっている、自分の意見を述べることを十分に行なっていないことが分かる。また、パラグラフ・ライティングのように文章を「組み立てる」技術についても高校までで教える場面は極めて少なく、むしろ感じたことを時系列で書き連ねる「綴り文章」が中心であることが分かる。

今後、このような背景をふまえ、中学から「綴り文章」だけでなく、「アカデミック・ライティング」にも目を向け、論理的思考の学びを積み重ねながら、「書く」力を身につけていく必要がある。そして、その一助としてルーブリックが活用されていくことを望む。

## おわりに

本研究は、「アカデミック・ライティング」ルーブリックを中学、高校、大学の教師が協力して開発したものである。能動的な学びには、「書く・話す・発表する」学びの

---

<sup>20</sup> 渡辺他（2017）pp.47-58.

活動が極めて重要である。しかし、その能力は短期間で身につけることはできず、繰り返し PDCA のサイクルを回しながら習得していかなければならない。生徒・学生が、中学、高校、大学のどの段階にあっても、10年間という学びのなかで蓄積しながら成長していくプロセスをループリックにより可視化し、段階ごとの達成目標を立てていくことは、学習者にとって極めて重要である。

ループリックは、見直すことでより完成度の高い指標となる。そのため、これからも改定を重ねながら、学びの現場で効果的に活用できるツールへと発展させていきたい。

## 謝辞

本研究は、金城学院大学父母会特別研究助成を受けたものである。

## 〔参考文献〕

### 書籍・論文・雑誌

安藤葉子（2018）「大学で必要とされる「書く力」とは」『文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要』（29）、pp.133-143.

井下千以子（2008）『大学における書く力考える力ー認知心理学の知見をもとに』東信堂

沖裕貴（2014）「大学におけるループリック評価導入の実際：公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して」『立命館高等教育研究』（14）、pp.71-90.

中島梓（2017）「アカデミック・ライティング教育科目におけるループリック使用の成果と課題：立命館大学映像学部における事例をもとに」『立命館高等教育研究』（17）、pp.199-215

西谷尚徳（2017）「文章力養成のためのループリック活用の教育的意義の検討ー授業実践から見る教育手法ー」『京都大学高騰教育研究』23、pp.25-35.

長谷川元洋他（2015）「WLI(Women's Leadership Initiative) のカリキュラム開発研究とリーダーシップの評価」『金城学院大学人文・社会科学研究所紀要』（19）、pp.47-57.

長谷川元洋（2018）「リーダーシップを含む汎用的能力の育成を目標とした授業デザインの改善」第24回大学教育研究フォーラム、p.181.

掘一成他（2019）『阪大生のためのアカデミック・ライティング入門』大阪大学 全学教育推進機構

松下佳代（2014）「学習成果としての能力とその評価：ループリックを用いた評価の可能性と課題」『名古屋高等教育研究』（14）、pp.235-255.

溝上慎一（2014）『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂

山田嘉徳（2015）「学びに活用するループリックの評価に関する方法論の検討」『関西大学高等教育研究』（6）、pp.21-30.

琉球大学 グローバル教育支援機構（2017）『琉球大学 URGCC FDガイド 第2巻ループリック編』琉球大学

脇田里子（2016）「ライティング・ループリックの実践」『コミュニカーレ』（5）、pp.21-50.

渡辺他（2017）『ライティングの高大接続高校・大学で「書くこと」を教える人たちへ』 ひつじ書房

## ウェブサイト

関西国際大学（大学間連携共同教育推進事業）「学修成果の可視化」、

<http://renkei.kuins.ac.jp/approach3.html>（検索日 2019年 5月20日）

関西大学ライティングラボ「学びの方向性と達成度を判断する評価ツール（ループリック）」、

<http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/useful/rubric.html>（検索日 2019年 5月20日）

東京女子大学コミュニケーション専攻「卒業論文作成・提出の手引き」、

<https://comm.twcu.ac.jp/thesis/manual.html>（検索日 2019年 5月20日）

文部科学省「学士課程教育の構築に向けて（答申）」2008年12月24日、

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm)（検索日 2019年 5月20日）

文部科学省「予想困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力をはぐくむ大学へ」2012年 3月26日、

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2012/04/02/1319185\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/04/02/1319185_1.pdf)（検索日 2019年 5月20日）

文部科学省「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」2012年 8月28日、

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm)（検索日 2019年 5月20日）

文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について（平成27年度）」、

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/1398426.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1398426.htm)（検索日 2019年 5月20日）

Association of American Colleges & Universities「VALUE Rubrics」、<https://www.aacu.org/value-rubrics>（検索日 2019年 5月20日）